

会津武家屋敷

この野外博物館では、19 世紀後半の高位の武士の生活様式を知ることができます。その主な特徴は、会津藩の家老である西郷頼母(1830-1903)の家を復元した武家屋敷です。家には 38 の部屋があり、家族とその一族の日常生活を垣間見ることができる芸術品とジオラマがあります。

複合施設では、弓道、伝統工芸品の絵付け、ガラス工芸などのワークショップを提供し、郷土料理を提供するカフェとギフトショップを併設しています。会津武家屋敷は鶴ヶ城から徒歩 30 分、御薬園から徒歩 15 分のアクセスです。

理性の声

会津武家屋敷をより楽しむためには、西郷家の生い立ちを知ることが重要です。頼母は 1860 年に大名松平容保(1836-1893)の家老に任命されました。頼母は徳川幕府との政治的問題を憂慮し、主君に対し新政府軍と関わらないよう求めましたが、その結果として地位を追われることとなりました。政情は悪化し、幕府と天皇への権力返還を望む人々との間で戊辰戦争(1868-1869)が勃発しました。頼母は会津藩の家老としての地位に戻るよう求められ、再び新政府軍と戦うことを警告しました。しかし彼の忠告はもう一度無視されました。1868 年秋、敵が鶴ヶ城を 1 か月にわたって包囲した後、容保とその軍隊は降伏しました。頼母は戦後、数年間投獄されましたが、神道の神官および柔術の武道の師範として尊敬を集めるようになりました。日光東照宮の宮司も務めました。

強さのある女性

頼母は戦争を生き延びましたが、彼の家族の多くは生き残ることが出来ませんでした。妻の千恵子(1835-1868)、2 歳から 16 歳までの 5 人の娘、そして、親戚の女性たちは、実家で戦争が終わるのを待っていました。敗北の知らせが届くと、女性たちは敵の捕虜になる代わりに自らの生を終わらせました。千恵子はまず、3人の幼い娘を刀で殺し、自らの命を断ちました。彼女の 10 代の娘たちであった 2 人の姉妹、そして義母も自害しました。会津武家屋敷内のジオラマはその惨劇の場面を再現しています。

なよたけの碑は、会津戦争(1868 年 10 月 ~ 11 月)で亡くなった 233 人の女性と子供たちに捧げられています。市内の全龍寺境内に建ち、千恵子が亡くなる直前に詠んだ歌が刻まれています。彼女は戦いに参加していませんでしたが、千恵子は会津武士の精神を独自の方法で表現していました。

「私は風にそよぐ竹葦に過ぎない

でも(聞いた話では)竹には何にも屈しないような強さがある」